

人外魔境

天母峰

小栗虫太郎

青空文庫

神踞す「大聖氷」

わが折竹孫七の六年ぶりの帰朝は、そろそろ、魔境、未踏地の材料も尽きかけて心細くなっていた私にとり、じつに天来の助け舟のようなものであった。では、それほど私を悦ばせる折竹とはいかなる人物かというに、彼は鳥獸採集人としての世界的フリーランサーだ。この商売の名は、海南島の勝俣翁によつてはじめて知つた方もあろうが、日本はともかく、海外ではなかなかの収入になる。ことに折竹は、西南奥支那の シフアン・テリトリー Hsifan territory —— すなわち、北雲南、うんなん 奥四川、しせん 青海、せいかい 北チベットにまたがる、「西

フアン・テリトリ
域夷蛮地帯」通として至宝視されている男だ。

たとえば、フィリッピンのカガヤン湖で獲れる世界最小の脊椎

動物、全長わずか二分ばかりの 蚤 リリプチャン・ゴビー 沙 魚 を、北雲南麗 リーキャ

江_ン連嶺中の一小湖で発見し、動物分布学に一大疑問を叩きつけ

たのも彼。さらに、青い背縞せじまのある豹ジャツカルの新種を、まだ外国人のゆ

かぬ東北チベットの鎖境—— 剽 ひょうとう 盜 Hsiancheng 《シアンチエン》

族がはびこる一帯から持ちかえったのも彼だ。そうして今では、

シフアン・テリトリ
西域夷蛮地帯 のエキスパートとして名が高い。

しかし折竹は、どうも採集人というそれだけではないらしい。

理学士の彼が教室にとどまらず、とおく海外へながれて西南奥支
那へ入りこみ、ほとんどを蛮雨裡に探検隊とともに暮しているこ

とは……いかに自然児であり冒険家である彼とはいえ、少々それだけは、首肯しかねる節があるように思われる。

事実、折竹には別の一面があるのだ。彼は、外国探検隊員という絶好の名目を利用して、その都度、西南奥支那の秘密測量をやっている。日本が他日、この地方への大飛躍を試みるとき、その根底となる測地の完成が、いま彼の双肩にかかっている。つまり、外国製地図の誤ごびゅう謬りゅうをただし、一度も日本人の手で実測が行われていない、この地方の地図を完璧なものにしようとするのだ。

しかしそれは、忍苦と自己犠牲の精神に富んだ日本人中の日本人、彼折竹を俟まってはじめてなし得ることだ。彼でなければ、誰が事変中の支那奥地へのこのこと乗りこめるだろう。あの海外学

会への名声がなければ、誰が外国旗のもとに万全の保護をしてくれるだろう。いま私は、その百万に一人ともいう珍しい男をみている。顔は嶽風と雪焼けで真つ黒に荒れ、頬は多年の苦勞にげっそりと削^こけている。私はなんだか鼻の奥がつうんと痛くなるような気持で、しばらくじぶんの用件をもち出すのも忘れていたほどだ。そこへ、折竹が察したような態度で、

「君は、Lha-mo-Sambha-cho 《ハーモ・サムバ・チョウ》を知っているかね」と訊いた。

「Lha-mo 《ハーモ》……」私が、しばらく目を見はったのみでなにも言えなかつたほど、それほど、のつけから啞然となるような名前だ。彼が……では、Lha-mo-Sambha-cho 《ハーモ・サム

バ・チヨウ》へ行つたのか、いやいや、あすこへは決して行けるわけがないと、心では打ち消しながらやはり訊かずにはいられない。

「君が、まさか往つたのではないだろうね」

「いや、往けばこそだよ。あすこは、ナショナル・ジオグラフィック・ソサ米 国 地 学 協

エティ会 のダネツク君が、ここ数年間執拗しつような攻撃を続けていた。僕

は、その最後の四回目のとき往つたのだが……そのときの、想像を絶する悲劇のさまを君に話したい。じつさい僕も、そのときの衝撃で休養が必要になつたのだ」

といわれ、はじめて気がついたように折竹をみると、色こそ、

※※の※※のローローリユーシような夷蛮いばんと異らないが、どこかに影がうすれたよ

うな 憔^{しやうすい} 悴^{すい} の色がある。これは、きつと肉体的な衝^{シヨツク}撃^クよりも精神的なものだろうと、思うとともに期待のほうも強まってくる。彼はたしかに、なにか想像もできぬような異常な出来事に打衝^{ぶつ}つたにちがいない。

ところでまず、Lha-mo-Sambha-cho 《ハーモ・サムバ・チョウ》について簡単な説明をしておこうと思う。

支那青海省の南部チベット境を縫い、二万五千フィート以上の高峰をつらねる巴^{パイ}顔^{アン}喀^{カラ}喇^ラ山脈中に、チベット人が、「天母^{ハーモ・サムバ}生上^{シヤウ}」の雲湖^{チヨウ}」とよぶ現世の楽土、そこにユートピアありと信じている未踏の大群峰がある。またそこを、鹹^{かん}湖^{ココ}「青海^{ノール}」あたりの蒙古人は Kuso-Bhikator-Nor 《クーズ・バカトル・ノール》——すな

わち、「英雄のゆく墓海」と称している。

成吉思汗が、

かんしゆく

甘肅省のトルメカイで死んだというのみで、

その後彼の墓がいずこか分らないのも、おそらく此処へ運ばれたのではないかといっている。そうしてそこは、揚子江、黄河、メ

ーコン三大河の水源をなし、氷河と烈風と峻險しゆんけんと雪崩なだれとが、

まだ天地開闢

かいびやく

そのままの氷の処女をまもっている。では、こ

こはたんなるヒマラヤのような大峻嶺かというに、ここほど、さぐればさぐるほど深まる謎をもつところはない。まず私たちは名称について考えよう。

山でありながら、蒙古称もチベット称も山といっていない。一つは雲湖、一つは墓海——。してみると、その連嶺の奥に湖水で

もあるのかというに、そこはまだ、飛行機時代の今日でありながら俯観したものが無いのだ。エヴェレストでさえ、フェロース大尉らによつて空中征服がなし遂げられている。ところが、ここではそれも出来ないというのは、主峰をつつむ常住不変の大雲塊があるからだ。うごかぬ雲、おそらく天地開闢以来おなじままだらう雲——。およそ雲といえば流動を思ふ読者諸君は、ここでまず最初の謎を知つたわけだ。

なるほど、モンスーンの影響をうける季節のこの連嶺の密雲はすさまじい。しかし、その季節以外は時とぎたまは偶霽はれて、Rim-bo-che《リム・ボー・チエ》（紅蓮峰）ほか外輪四山の山さんてん巔だけが、ちらつと見えることがある。しかし主峰は、いつも四方フイート

にもおよぶ大積乱雲に覆われている。だいたいこれは、気象学の法則にないことで、二万五千フィートの上空には巻層雲しかない。それが、時には雷を鳴らし電光を発し、大氷嶺上で時ならぬ噴火のさまを呈する——その怪雲は明らかに不可解だ。と同時に、雲湖とチベット人がいい、墓海と蒙古人がいうわけも、読者諸君にのみ込めたことだろうと思う。

じつさい、裾^{すそ}はるかを遊牧する土民中の古老でさえ、その主峰の姿をいまだに見たものはない。したがって、高さも一体どのくらいなのか分らず、あるいは、そこには山がなく雲だけではないのか。それとも、エヴェレストを抜く三万フィート級の、世界第一の高峰が知られずに隠れているのではないかと……いま世界

学界の注視と臆測をいつせいに浴びているこの大氷巔は、またラマ僧が夢想するユートピアの所在地だ。

かの大雲塊でさえ容易ならぬことなのに、時偶、姿をあらわす外輪四山の山巔が、それぞれちがった色の綺^きらびやかな彩光をばなつのだ。すなわち、リム・ポー・チエ紅蓮峰は紅にひかり、さらに、白蓮、

青蓮、黄蓮と彩光どおりの名が、それぞれの峰につけられている。

でここに「絵入ロンドン・ニュース」の短文ではあるが、第一回

ハーモ・サムバ・チヨウ

「天母生上の雲湖」探検記を隊長ダネツクが寄せたなかから、

彩光に関する部分を抜きだして掲げてみよう。

——この霞^{かす}んだ空のひかりと淡い曇りをさして、この地方の土

民は晴天だといっている。それほど、碧い空と陽のひかりは滅多に訪れてこない。私たちはいま、ここが人界の終点だろうと思う。バダジャツカの喇嘛寺で、いまに現われるという彩光をみようとしている。

やがて、頬をさすような冷たい霧が消えたむこうに、まるで岬をみるような山巒が隠見しはじめ、と思うまに、はるかな雲層をやぶって霧が峰とでもいいいたいような、ぼやつと白けた角のような峰があらわれた。私が、かたわらの高僧にあれですかと聴くと、いいえと、銅びかりのしたその老人は首をふった。その峰は、ここが海拔約一万六千フィートとすれば、おそらくそれを抜くこと八千フィートあまりだろう。私はそこで、首の仰角をさ

らにたかめて空をみた。

まもなく、よもやそこにと思われる中空の雲のあいだから、ぬうつと突きでた深紅の絶巔——。おう、まだ地球が秘めている不思議の一つと思うまに、その紅の峰はくれない瞬またたくまに姿を消した。とそこへ、ツアンバ麦粉とヤク牛のバタを焼く礼拝のにおいがするので、みると、いまいた高僧ギクをはじめ大勢が祈っている。私が、あの峰をなげ拝むのかと訊くと、その高僧がつぎのように語ってくれた。

「チベット蔵経の、カンジュール・ギユイト正蔵秘密部の主経に、孔雀王経と申すのがあります。そのなかに現われる毘沙門天ヴァイシュヴァナの楽土が、そもそもあのお峰でござりまする。ではそれが、孔雀王経にはなんと書かれてあります。それは、ヒマラヤを越え北へゆくこと数千里、

そこに氷に鎖とぎされる 香 醉カンドハマーダなる群峰があり、その主峰をよんで阿羅迦槃陀アラーカマンダといい、すなわちそれは、高原中の大都なる意でござりまする。おう、蓮オム・マニ・パードメ・フム苾中の宝玉よ、アーメン」

と、私は祝福され若干のお布施をとられた。これで、私の来世がはなはだ良いそうなのである。高僧は、なおも節のようなものをつけて、勿もったい体そうに語つてゆく。

「で、そこには、四大河の水源をなす九十九江源ナブナテイヨ・ラハード地なる湖水あり、その湖上には、具アムラバアムラワテイ諸衣宮殿なる毘沙門ヴィシユラヴァ天の大宮殿さらに、外輪山はこれ四峰あり、阿アターナータ曩クナータ、俱曩クラクシナ、波里俱娑曩バラクシナ、ナータブリカ曩拏波里迦。そうしてそれぞれの峰には、発する彩光の色により、四とおりの別名あり。紅くれないにかがやくは、紅氷蓮バードマの咲く花プシパ

醉境マーダ、白光を発するは、白氷蓮クンダリカの咲く吉祥醉境シリマーダなどでござり
 まする。そこは、氷嶺とは申せ氣候春のごとく、あらゆる富貴、
 快樂を毘沙門天ヴァイシユラヴァナがお与えくださいます。私どもも、そこへ行き
 着きとうて修行いたしますなれど、まだ花醉境の裾をみたものも
 ござりませぬ」

ユートピア、これこそ喇嘛ラマの夢想樂土であるが、しかし孔雀王
 経中の四峰の彩光といい、すべてが現実そのままなのも奇怪だ。
 花醉境プシパマーダとは、すなわち今いう紅蓮峰リム・ポー・チェであらうし、九十
 九江源地イヨ・ラハードとは、三大河の水源地という意味であらう。理想郷も、

よし今はなくも遺跡ぐらひはあらうと、ますます大氷嶺の奥ふか
 くのものに心をひかれ、いま冷い密雲に鎖されうしなわれた地平

線のかなたを、私はしばらく魅入られたようにながめていた。

しかし、あの彩光の怪は科学的に解けぬものだろうか。私は、

あれが水晶の露頭ではないかと考える。しかもそれが、そばのラ

ジウム含有物によつて着色されたのではないかと、推察する。ラ

ジウム、ピッチブレンド含有瀝青土 —— 私は、神秘境「ハーモ・サムバ・チヨウ天母生上の雲湖」を

大富源としても考えている。

だが、登行を果さずになんの臆測ぞやだ。これから、外輪紅リム・

ボー・チエ蓮峰の裾まで八十マイル強、その大氷河、堆石のながれ崎き

きよたる氷稜あり雪崩あり、さらに、風速七十メートルを越える大

烈風の荒れる魔所。私たちは、やがてヤク牛をかり地獄の一本道を

ゆかねばならぬ。

ところが、三年をついやし三回の攻撃を続けても、ついにダネツクらは紅蓮峰リム・ポー・チェの裾の、大氷河を越えることはできなかつた。そこを、吹きおろす風は七十メートルを越え、伏しても、はるか谿底たにそこへ飛ばされてしまうのだ。——以上が私の、「天母ハーモ・生上サムバ・チヨウの雲湖」についての貧しい知識である。それへ折竹が、三回の探検による科学的成果と、偶然、彼が発見した新援えんしょう 蔣ルートの話を加える。

「ではまず、本談に入るまえにだね。ダネツクの、失敗中にも収穫があつたことを話しておこう。それは、バダジャツカのある洪積層の谿谷から、前リノツエロス・アンチクス 世界エロス・アンチクス 犀の完全な化石が発見されたこ

とだ。こいつは、高さが十八フィートもあるおそろしい動物で、まだそのころは犀角もなく、皮膚も今とちがつてすべすべとしていた。ところが、こいつがいたのが二十万年ほどまえの、第三紀時代のちようど中ごろなんだ。洪積層は、それから十万年もあとだよ。すると、後代の地層中（きづか）にいる気遣いのない生物がいるとなると、当然まだ、『（ハーモ・サムバ・チヨウ）天母生上の雲湖』にはそういうものが残っているのではないか。第三紀ごろから出た原始人類も、やや進化した程度でそのままいるんじゃないか。とマア、こういうような想像もできるわけだね」

「うん、できるだろう。それで、その連中の史前文化のさまを唱（うた）つたのが、とりも直さず孔雀王経ではないかとなるね」

「そうだ、だが、いまのところは話だけにすぎんよ。ところで、ダネツクは紅蓮峰リム・ポー・チエの彩光をラジウムのせいだといっているね。なるほど、いちばん毛唐にピンとくるのは欲の話だからね。

しかし僕は、どんな富源でも後廻しにしなきゃならん」

「なぜだね」

「それはね。香港封鎖後の新援蔣ルートなんだ。インドシナから、雲南の昆明をとおってゆくやつは爆撃圏にある。彼らは、じつに不自由な思いをする夜間輸送しかできないのだ。ところが、事実上然らずというわけで、さかんにイギリス製の軍需品がはいってくる。これは、可怪おかしいというので僕へ指令がきた。イギリスの勢力圏であるチベットをとおって、重慶へ通ずる新ルートがあるの

ではないか　しかしそれは、『ハーモ・サムバ・チヨウ天母生上の雲湖』の裾しやだん続きで遮断される。裾といつても、二万フィートを下る山はないのだからね」

「すると」

「ところが、僕は予想を裏切られた。マアこれは、本談のなかで詳しく話すことにしよう。で、『ハーモ・サムバ・チヨウ天母生上の雲湖』で起つたおそろしい出来事だが……惜しいことに、僕には君のような文士を納得させるような喋り方が出来ない。サア、なんとか文学的というのかね。それほど、これは人間のいちばん奥ふかいものに触れている」

折竹は次のように語りはじめた。

白痴女と魔境へゆく男

檻ぼろよりも惨みじめ——とは、失敗した探検隊のひき上げをいう言葉だろう。ダネツクは、基地の察リーミエン 緬ほうほうへ這々の体でもどつてきた。ここは、折竹が三年もいる土地である。西雲南の、東経百度の線と北回帰線のまじわる辺り、そこだけ周囲とかけはなれた動物区をいとなんでいる、いわゆる察リーミエン・サフプロヴァインス 緬 小地 区の盆地だ。

折竹は、アメリカ地理学協会の依頼で探検には加わらず、もっぱらここで採集に従っていたのだ。すると、その第三次「天母ハイモ」

生上サムバ・チヨウの雲湖「探検の犠牲者のなかに、
 全覆式オートジャイロケビンの操縦者でタマス木戸という、彼の腹心と
 もいう二世の青年がいたのである。折竹が、それに気付いたとき
 の失意のさまといたら、剛毅ゴウキな彼とはとうてい思えなかつたほ
 どだ。木戸は飛行中「天母ハイモ・サムバ・チヨウ生上の雲湖」の主峰の雲にひき込ま
 れたのだ。

「とにかく、木戸君を酷使した嫌いがあつたかもしれん。しかし、
 それは上空からの偵察で登攀トウハンの手がかりを見つげにやならんし、
 じつに、飛行回数百二十一という記録だつた。ところが、白、黄、
 青の三外輪はひっきりなしの雪崩ナダレだ。ただ紅蓮リム・ポー・チエ峰の大氷河
 だけに口が空いているが、そこは、君も知る大烈風が吹き下して

いる」

その夜——。インドのビルマちかい巨竹の森のここでは、ぶんぶんジャングルの風が腐竹のにおいを送ってくる。ジャツカルほ 豺が咆え、野豚ンゴウが啼く熱林のなか——。そこに、アメリカ地理学協会が建てた丸太小屋がならんでいて、いまダネツクが胸毛をおおぎながら、木戸の最期のさまを折竹に話している。

「しかしだよ、木戸君の犠牲でやっと分かったのは、あの『天ハーモ母生上・サムバ・チヨウの雲湖うずまき』の主峰の雲の正体だ。あれは、おおきな気流の渦がある。メツシナ海峡にはカリブジスがあるね。しかしそういう、退潮と逆潮とでできる海流の渦のような気流は、残念なこ

とにあの上空にはない。きつと僕は、主峰があるといわれるあの雲の下が、もの凄い大空洞ではないかと思うんだ。サア、陥没地、だいていじょう大梯状盆地というかね。それも、上空に渦をおこさせるほど、ものすごく深いもんだ」

「じゃそれを、木戸君が確めたのかね」

「いや、ただ最後の無電でそう推察できるんだ。機はいま、旋流にまきこまれ、主峰の雲へ近付いていく——それがまず最初のものだった。続いて、もう我らには旋流をのがれる手段はない。神よ、隊員諸君とともにあれ——とあつた。と間もなく、たしか五六分経つてからだろう、とつぜん『大渦卷』ガロフオラ』というあの一言がはいった。僕らは、もう絶望し胸せまって十字を切った。すると

だよ」

「ふむ」

「それから、誰も感慨ぶかげな顔でもものも言わない。そこへ、もうないと断念^{あきら}めていたころ、ふいに最後の通信がきた。見た——という、たった一言だが、見たというんだ。そして木戸は、その謎語をのこしたまま無電のオーハラとともに、おそろしい魔境の神に召されたのだ」

その無電のうち「大渦卷^{ガロフオラ}」と打ったころは、たしかに木戸の

機は怪雲に入っていたにちがいない。それがたんなる巨大な渦雲にすぎないということは、ただその一言だけでも容易に想像がつくことだ。それから、機は旋回しながら墜^おちこんで行ったのだろ

う。そして、「ハーモ・サムバ・チヨウ天母生上の雲湖」のしんかく真核の地上ちかくになつて、木戸はたしかに何物かを見たのだ。

ユートピア　数マイル切り下おれた大空洞の底。そこは、零下六十七度の地表とはちがいなご和やかな春風が吹き、とうてい想像もできぬような桃源境があるのではないか　いや、木戸はそれを見たのではないかと、最後に木戸が投げつけた謎語をめぐりながら、よくやった、最後まで氣力を失わなかったのはやはり日本人だと、涙と奇鬚きあひをひろげる夢想世界のなかで、しばらく折竹は一言もいえなかつた。

そこへ、きゆうにダネツクが激越な調子になつて、

「いよいよ僕も、『ハーモ・サムバ・チヨウ天母生上の雲湖』とはお別れということに

なつたよ。探検を、一時中止しろという厳命がくだってしまった。それで、いま俺は返電をやつたよ。お前らは、この俺に信頼がもてないのか、それとも費用が惜しくて続けられないのかと、いま訊きかえしてやつたところだ」

ダネツクが帰ると、きゆうに折竹の目から堰せきを切つたような涙がながれてきた。それとともに、なにやら独り言のように俺がやるぞと言いながら、彼は亢こう奮ふんし、とり乱したようになってしまった。

なるほど、木戸への哀惜の念もあろう。しかし、折竹ほどの、男の目にさんさんたる粒が宿るといふことは、もつと、大きな大きな感情の昂たかまりでなければならぬ。では、なにが折竹をそうさ

せたかというに……さつき彼が私に話した新援蔣ルートの所在を、木戸が「天母生上の雲湖」ハーモ・サムバ・チヨウをさぐる飛行中に発見したからである。

揚子江上流の一分流の Zwagri 《ツワグリ》河が、「天母生上の雲湖」とバダジャツカの間あたりを流れている。絶壁と、氷蝕谷の底を、ジグザグ縫うその流れは、やがて下流三十マイルのあたりで激流がおさまり、みるも淀よどんだような深々とした瀨とろになる。そしてその瀨が、断雲ただよう絶壁下を百マイルも続いている。

ところが一日、木戸がその瀨をゆく見馴れぬかたちの舟をみたのだ。どうも、土地のタングウト土人のメンヌサ樅皮舟ともちがう。しか

も、それが一つや二つではなく二、三十艘も続いている。で結局、それが英海軍でつかう兼ピンネス・パージ帆、舢ハーマ・サムバ・チヨウだつたのだ。とにかく、チベツトを横切り「天母生上の雲湖」を左に見、Zwagri《ツワグリ》の大漕をくだって陸揚げしたものを、一路重慶へもちこむ新援蔣ルートだ。

折竹は、木戸からその報を得たとき、これは黙視できぬ、と考えた。といつてそこは、万嶽雲にけむる千三百キロのかなたである。彼は、切齒せつしやくわん扼腕、齒はが噛みをして口惜しがつたのだ。

するとそこへ、もしもそこへ行けたならという仮定のもとに、そのルート破壊の大奇案がうかんできた。

それは、奔湍ほんたん巖をかむ急流のZwagri《ツワグリ》が、なぜ

そこまでが激流で、そこからが瀧をなすのか——それを、折竹が謎として考えたからだ。瀧とは、数段の梯ていじょう状をなす小瀑の下流か、それとも、ふいに斜状の河床が平坦になるかなのだが、この Zwagri 《ツワグリ》 の場合はいずれのものでもない。と（い）いに、「天母生上の雲湖」の九十九江源地ナブナテイヨ・ラハードからでて、地下の暗道をとおり水面下に注ぐ川があるのではないか。暗黒河は、中央アジアの大名物である。それが、「天母生上の雲湖」付近に必ずしもないとはいわれまい。

つまり、Zwagri 《ツワグリ》 のその点をさぐって暗河道をふさぐか、それとも「天母生上の雲湖」ハーモ・サムバ・チヨウへわけいつて源流を閉じるか、——その二者以外に遮断の方法はないと考えていた。なぜ

なら、水量が減れば激流となつて、その舟行がたちまち杜絶するからである。

「くそつ、カーネギーの金庫を背負つた学会がなんて醜態だ。二度や三度の、失敗で平張^{へば}るなんて、外間があるぞ。俺も、今度こそは往つてと思つていたのに……」

ダネツクがいつた探検中止の報が真実とすれば、支那事変終止を早からしめる援蔣ルート^の遮断も、魔境「天母生上の雲湖」征服もいっぺんに飛んでしまう。みすみす、機会を目のまえにしなから、なんて事だろう、焦^{あせ}ればあせるほど眠れなくなつて、その夜折竹はまんじりともしなかつた。すると、それから三日後に、いよいよ探検中止確定をダネツクがしらせにきた。

「これで俺も、いよいよハーヴァードの地学教室へもどるんだ。

遠征五年、隊員十六名を失っただけで、なんの得るところもない。

ねえ、『ハーモ・サムバ・チヨウウ天母生上の雲湖』は永劫えいごうの不侵地かね」

ダネツクも、さすがその日はぐったりしていた。彼は、アメリカ

に籍はあるがチエコ人。せいかん精悍、不屈の闘志は面がまえにも溢

れている。三十代に、キヤナデアアン加奈陀 ロツキーの未踏氷河 Athabaska

《アタバスカ》をきわめて以来、十年、彼はスノウ・ライン恒雪線とたた

かっている。雪焼けはとうに、もう地色になっていて、彼は自他

ともゆるす世界的グレイシヤリスト氷河研究家だ。

「吊い合戦」と、のぞき込むような目でダネツクが言った。それ

は、彼自身にとっても身を焼くような執着である。

「君も、今度は木戸のために闘うところだったね。『天母生上の雲湖』に復讐するところだったね」

「そうだ。ところで、君に言おうかどうかと迷っていたんだが……」と、とつぜん折竹が改まったように、切りだした。

「さつき、白夷人シヤンの召使が聴きかづつてきたんだがね。ここへ何でも、『天母生上の雲湖』ゆきの新隊がのり込んできたというのだ」

「なに、われわれ以外の探検家とはどこの国のだ」

みるみる、ダネツクの目がすわり、額が筋ばつてくる。これが、彼のいちばん不可いけないところだった。じぶんを持することあまりに高いために、すぐ人と争い猜疑心さいぎしんを燃やす癖がある。いまもほうほう這々の体でもどつたところへ新しい隊と聴き、彼はさながら身

を焼くような思いだったろう。ところが、折竹が含みわらいをし
て、

「マアマア、話は全部聴いてからにし給え。それがね、探検隊と
はいえ、じつに妙なものなんだ。触れ込みはそうでも、総員男女
二人しかいない」

「なんだ」 ちよつと、ダネツクの顔色が和^{やわ}らいだ。案外、事
実を知ったら吹きだすようなものかもしれない。彼は、バンドを
揺^{ゆす}つて、嗤^{わら}いながら立ちあがった。「そうか、其^{そいつ}奴が、僕の『天^ハ
母^{ーモ}生^{・サムバ}上^{・チヨウ}の雲湖』における経験^ハを聴きたいというのだね。よろし
い、今夜そのちんまりとした探検屋に逢つてやろう」

アメリカ地理学協会「^ハ天^{ーモ}母^{・サムバ}生^{・チヨウ}上^ウの雲湖」攻撃隊は隊員二十一

名、人夫は、ミョウツエ苗族、ローロー※※、モツソ各族を網羅し二百余名なのに、ここに、あらたに現われた新隊の人数総員二名とは、まずまず聴けばままごとのような話である。ダネツクと折竹は、その日の夕がた新来者の宿を訪れた。

そこは、折竹と懇意な漢人の薬房で、元肉、当帰樹などの漢薬のくすぶったのが吊されている。店をとおつて奥まった部屋へとおされた。そこには、浮腫ふしゆでもあるのか睡ねむたような目をした、五十がらみのずんぐりとした男が立っている。デンマーク丁抹ぢんまの、クロムボルグ記念文化大学の教授ケルミツシュといった。やはり彼も、チエコ人で梵語ほんご学者である。

「ここで、国のお方にお逢いできるとは、望外な倖せです。私は、

『天母生上の雲湖』登攀の希望をもって、いささか仏教文学の方面からもあの地を究めておりますので……」

「それは」とダネツクが無遠慮に遮った。

「あなたのは、つまり、教室だけの『天母生上の雲湖』でしよ

う。あの辺と、古代インドの交通を書いた大集月蔵という経がありますね。しかし、登行には科学的準備が要ります。もちろん、科学的鍛練、経験もものをいいます。僕は、これでも氷河とは十年も暮してますが、あの、『天母生上の雲湖』には赤児のように捻ひねられますぜ」

「では、私なんぞには登れぬと仰言るのですね。なるほど、私にはなんの鍛練もない。氷ピッケル斧を、どう使うかも知らないし、アル

プスの空気も知りません。素人です。僕は、全然の無経験者です」

それには、折竹もダネツクも少なからず驚いた。冗談や粋狂で

ゆける「天母生上の雲湖」ではない。きつとこれは、いい加減な

ところまで往って引き返したうえ、「わがハーモ・サムバ・チョウ天母生上の雲湖 死闘

記」などと空々しいものを発表する、許しがたい売名漢ではない

のか。ダネツクも、さいしよは彼の競争者として警戒を怠らな

ったのが、もう聴くも阿呆あほらしいというような素振りになった。

もちろん、そこまでのケルミツシユはいかにもそうであつたらう

が……。

「ですが、ダネツク教授」とケルミツシユが改まつたように、言
つた。

「私は、些いさかながらあの魔境いさについて知っております。あなたが、五か年の辛苦のすえやつと究きめたもの以上を、私は、ヨーロッパにおりながら不思議にも存まじているのです。ねえ、まだ短文以外の探検記の発表はありませんね。隊員中、途中で帰国した方も一人も無いと思ひますが」

「ふうむ」ダネツクは愚弄ぐろうされたように唸うなつた。五年間、人力がつくせる最高のエネルギーを發揮して、氷河と、大烈風とひつ組んだじぶんのあの労苦を、いま舌三寸で事もなげにいうこのペテン師と、彼は怒氣あふれた目で、ぐいと相手をにらみ据すえた。

「君が、そんな魔法使いなら羽くらいはあるだろう。どうだ、僕を『ハーモ・サムバ・チヨウ天母生上の雲湖』まで、乗せて飛んでいってくれ」

「いやいや、ただ私という男がけっして無価値なものでない——それを、ともかくお知らせしとこうと思うのです。ところで、あの外輪四山のうちの紅蓮峰リム・ポー・チェの嶺ですね。あれは、東南からのぞめば角笛形をしているが、ちよつと、西へまわると隠れていた稜角りょうかくがでて、その形が円錐になりますね」

これには、さすがのダネツクもあつと驚いた。まだ、あの山嶺の写真は一つしか発表してない。西側からののは、実をいうと写真にもとつてないのだ。それを、万里の雲煙をへだてたヨーロッパにいて知るとは、なんとという化物のような男だろうか。

ダネツクが、打ちのめされたように茫然ぼうぜんとなつているところへ、ケルミツシユのもの静かな声が続く。

「これで、ダネツク教授もお分りになったことと思う。私は、今後の探検についてあなたの協力を求める。いや、ぜひお力添えを得たいと思う。それに就いて……」

と言いかけたとき、ボタンと扉があいた。西日が叢葉むらばのすきから流れるなかへ金髪が燃え、ひとりの、白人女がふらふらと入ってきた。

「ああ、ケティ」ケルミツシユが、ちよつと眉をしかめ立ちあがつて肩を抱いた。

見ると、金髪の色といい碧へきがん眼の澄みかたといい、一点、非のうちどころのないドイツ娘である。しかし、それ以外の部分はなんとという変りかた　厚い唇をだらりと空けた様さま。

顔はだだ広く鼻は結節をなし、ほそい目の瞼がきりつと裂けて
いる——まさに、このほうは完全な蒙古人だ。そのうえ、一目で
白痴であるのが分るのだ。

これかと、ダネツクも折竹も啞然と目をみはった。これが、ケ
ルミツシユの同伴者とはますます出でて奇怪だ。癡呆ぼかを連れてき
てあの大魔境へのぼる　さつきの紅蓮峰リム・ポー・チエの山嶺のことで
グワンとのめされた二人は、いよいよ神秘錯雑をきわめるこのケ
ルミツシユのために、いまは、引かれるままの夢中裡りの彷徨ほうこうだ。
日が落ちた。巨竹の影が消え角蛙つのかわずが啼なきだした。暑さはい
くぶん退いたが、二人のこの汗は。

大氷河の胎内へ

その夜から、ダネツクの懊惱おうれうがひどくなつた。なんの、ペテン師、売名漢と初手から見くびつたケルミツシユが、さながら人間以上のおそろしい力をもっている。もしも、彼ダネツクが優秀な科学者でなければ……、ケルミツシユもあの娘も魔境「天母ハイモ・生上サムバ・チヨウの雲湖」の、ユートピアの住人がひそかにあらわれたくらいに思うだろう。

だが、この場合懼おそれるのは登攀の成功だ。魔境の大偉力に対するダネツクの科学より、むしろ神秘対神秘力でケルミツシユではないのか。辛酸五年の労苦が水泡すいほうに帰したところへ、あらたな

力を抱^{いだ}いて魔境へゆくケルミツシユをみる、ダネツクの胸のなかの切なさ。ところへ、二、三日経って二度目の会見が行われた。

「きようは、全部のことを包まずお話ししようと思うのです」

相変らず、ケルミツシユを鬱^{うつうつ}々としたものが覆っている。二人

人は前回の影響もあり、白昼幽霊をみる思い。

「私が、なぜヨーロッパに居りながら、あの魔境のなかを知っているか。それにはじつをいうと次のような話があるのです。あなた

の方は、『宣^{シユウチヨウ}寶^{パピルス}の草漉紙』『メンヤンの草漉紙』という名の

漂着物をご存知ですか。一つは揚子江の流れをくだり四川省の宣^シ

寶^{ユウチヨウ}、一つはメーコン河をくだって仏領インドシナのメンヤン

へ、それぞれ流れついたものがあつたのです。

それは、古来から何処にもないような草漉紙パピルスでした。そしてそれに、チベット文字のようなジャワ文字のような、とにかく、その系統にはちがいないが判読できぬという、じつに異様な文字が連つていました。たいていの学者は、それをなにかの悪戯いたずらのよう
 うに考えたらしいですが、私は、それに執心しゅうしん五年、やつと読
 み解くことができたのです。

シユウチヨウ

宣 寶 のには、紅玉光ルビーをはなつ峰のさまが書かれてある。そ

れが先日、私がたしかめた紅蓮リム・ポー・チエの山巔ルビーでした。あの二つ

の草漉紙は、それぞれ『天母生上の雲湖ハイモ・サムバ・チヨウ』の九十九江源地ナフナテイヨ・ラハード

から流れてきたのです。私は、あの大氷嶺のなかの天母人の文化、
 魔境の、天険のなかにも桃源境があると思うと、思わず、われ行

かんユートピアへと叫んだのです。

いま、国をうしなつたチエコ人の願いは、どこか地図にない国があれば、そこへ往きたい。そして、亡国よという声を聴かずにいたいというのです。折竹さん、これは国運日々すすむ東亜の盟主、日本のあなたはとうてい分りますまい。いや、あなたは亡国者の無気力の夢と嗤^{わら}うでしょう」

見ると、ケルミツシユの双頬が二筋三筋濡れている。折竹は、しみじみ神国にいるじぶんの幸福を感じたが、案外、おなじチエコ人でもアメリカ育ちの、ダネツクは感じないようみにえた。ケルミツシユは、涙に気づいたのか、慌^{あわ}てたように亢奮をおさめた。「それから、『メンヤンの草漉紙^{パピルス}』のほうは孔雀王経です。やは

りあれば、天母人の大文化を唱ったものです。それには、一、二か所ちがったところがありまして、あに竜の森へゆくを得んや——というところがある。その竜という字がアデイ・ナゴ棘蛇とかわつているのです」

アデイ・ナゴ「棘蛇」とダネツクがちよつと目を剥むいた。

「棘蛇、あの第三紀ごろにいた游蛇類ですか」

「そうです、少くともそう思われますね」と熱したダネツクの目を冷やややかにみて言った。

「それで略ほぼ、バルチテリウム前世紀犀が十万年もあとの、洪積層から出た理由も分ります。要するにそこは、人獣ともに害さぬ仏典どおりの世界でしょう。それこそ、つらい現実からのがれるくつきよう倔強な場所

です。私は……そうして理想郷を見つけました」

「では、無^ぶ賤^{しつ}なようですが連れのご婦人は？」と折竹がたまらなくなつたように訊いた。しかし、それは、ケルミツシユが続けて言おうとするものだった。

「ケティ……そうです。あれは、じつに珍しい完全な蒙^{モン}古^ゴ型^{ロイ}癡^ド呆^ドです。蒙古型癡呆とは、お二人には説明も要りますまいが、遠い、遠い昔入りこんだ蒙古人の血が、ぼつりと、数万年後のいま白人種にでるのをいうのです。彼らは、蒙古人のするとおりの真似をする。胡^{あぐら}坐^らをかく、手^{づか}掴^みで食^いい、片^{さば}手^で馬^を捌^く。しかし、智能の程度は小学生をでぬ。とマア、こういったもんです。

でケティは、もとサーカスの支那^{ろば}驢^ば馬^りでした。そして白痴

なもんで 虐待ぎゃくたいをうけていた。すると、その金髪碧眼へきがんに蒙古的な顔という、奇妙な対照が僕の目をひいたのです。もともと私は、白人文明の破壊性が心から厭で、東洋思想に憧れればこそ、梵語などをやりましたが……。一夕、ケティをよんで飯を食わしたことがあるのです。

その席上、偶然私がとり出した『宣シユウ寶チヨウの草漉紙パピルス』をみてケティがなにやら音読のようなものを始めた。そこで私は、学校に よんで録音をさせました。それから、時経てからまたケティに読ます。しかし、やはりなん度読ましても、おなじように読む「なるほど」ダネツクが始めて相槌をうった。

「つまり、私は意味は分るが音読ができぬ。ところが、ケティは

意味は分らぬが音読はできる。と、こんな工合で、はじめて『天^ハ母^ハ生^モ上^サの雲湖^ム』の言葉が完全に読めたわけです。ケティは蒙^{モン}古^コ型癡^ゴ呆^{ロイド}というよりも、天母^ハ型癡^モ呆^{ロイド}ですよ」

「すると」と折竹が口をはさんで、「きつと太古に、ヨーロッパへきた天母^ハ人^モの一族があつたのでしよう」

「そうです。その血が、なんでいまの白人種に絶無といえるでしょう。ですから、私は東洋思想に溶けこんでいるせいか、有色人^ベ蔑^ッ視^シをやる白人種を憎みます。ナチスの浄血、アングロサクソンの威——かえつて彼らは、じぶんらにある創成の血を蔑^サん^ゲでいる」

続いてケルミツシユは、いずれなにかの役にきつと立つと思うので、ケティを連れてきたといった。世界に一人、秘境「天母生

上の雲湖」の言葉を読む白痴のケティ、その彼女を連れて魔境のなかへ消えようという……このケルミツシユの探検ほどおよそ奇怪なものはない。

折竹は、それから懸命にダネツクを説いた。途中は、麗江リーキャンのあたりから二万フィート級の嶺々が、約七、八百キロのあいだをぎつしりと埋めている。それに、Kolo 《コロ》 のように慄悍な夷蛮はあり、ともかく西域夷蛮地帯シフアン・テリトリをゆくには経験に富んだ、ダネツクのようなエキスパートを俟またねばならぬ。しかし、ついに折竹は相手を説き伏せた。名を、ダネツク探検隊とするということにして、ともかく、名利心を釣り納得させたのである。よかつたと、彼はホツと吐息をした。これで、いよいよ援蔣ルート遮断

の日も近いと、ひそかに故国の神へ折竹は感謝した。

これには、富有なケルミツシユが全資産を注ぎこみ、いよいよ準備成つた翌年の三月、えんえん 蜿蜒の車輛をつらねる探検隊がリーミエ 察緬ンをでた。そこから大理タリ、大理から麗江リーキヤン、じつにそこが西域シフアン夷テリトリの裾だ。北緯二十六度、V字型の谿たにには根樹ガツマルの気根、カターン 茄苳、巨竹のあいだにきょうちくどう 夾竹桃がのぞいている。

「おい、どうした君、歩けないかね」

ケルミツシユが、おそらく老年の豹でもあるいたらしい泥濘でいねいの穴に足をとられ、ぺたりと、面形を地につけ動けなくなつてしまった。そこには、暖水をこのむ大蟻ありが群れている。陰湿の、群葉のしたは湯気のような沙霧ヘーズだ。

「さあ、足を踏んばって……、おいケティ、ケルミツシュ君に肩を貸してやれ」

「なんて、意気地がない。男ざかりが、泡あわアふつくらつて可笑おかしくなるよ。おや、なんてえ滑すべつこい肌だろう」

この、疲れをしない石人のような頑健さ。時々ケティは弱いケルミツシュの生いきづえ杖になつていた。

しかし、そこからは一步一步がたかく、それまで梅せん檀だんのあいだに麝香鹿じやこうじかがあそんでいた亜熱帯雲南が、一変して冬となる。

揚子江の上流金沙江の大絶壁。じつに、雲をさく光峰ピークからくらい深淵の河床にかけ、見事にも描くおそろしい直線。それが、一枚岩びようぶというか屏風岩びようぶといおうか、数千尺をきり下れる大絶壁の底

を、わずかな苔^{たいけい}経をさぐり腹這いながらゆくようなところがあ
 る。そこは、鳥も峡谷のくらさにあまり飛ばないところ……。そ
 こを、やつと抜けでて西康省に入ればよいよ崎^{きく}嶇をかさねる西^シ
 フアン・テリトリ
 域夷蛮地帯の山々。

あるいは恒^{スノウ・ライン}雪線にそい、あるいはすこし下つて、一万フイ
 ートあたりの石南^{しやくなげ}花帯をゆく。巨峰、鋸齒状の尾根が層雲をぬ
 き、峡谷は濃霧にみち、電光がきらめく。そして、雹^{ひょう}、石のよう
 な雨。またその間に岩陰に目をむく、土族を追えば黒豹におどさ
 れる。まったく、それは四月間の地獄のような旅だった。そうし
 て、七月のはじめバダジャツカに着いたのである。

そこには、バダジャツカの喇嘛^{らま}寺があり、人煙はそこで杜絶え

る。しかし、そこから「ハーモ・サムバ・チヨウ天母生上の雲湖」へかけては大高原をなしている。

その夜、断雲からもれる月が雪のうえに輝いていた。巖の輪郭をきざんだ手近の尾根をながめながら、折竹とダネツクがひそかに語っている。それは、ゆうべダネツクが見付けたことであるが、ケティが深夜ケルミツシユの部屋へ入ったというのだ。

「どうも、白痴がケルミツシユ君に惚れてるらしいんだ。悪女の、なんとか情とかでケルミツシユ君も、ゆうべは辟へきえき易していたらしかつたよ。それがね、僕が寝ようとした時だった」

ヤク牛の乾脂の燃える音が廊下を伝わってくる。ひよいと覗のぞくと、ケティが平らな顔をニタリニタリとさせながら、向うのケルミツ

シユの部屋のなかへ入ってゆく。ダネツクは、もの好き半分、扉のすきから覗きこんだ。

「なに、なんの用できたね」ケルミツシユが空咳からせきをした。見るとなんだか、不味まずいものがいっぱい詰まったような顔だ。

「なんだといつて……　　なんだか、あたいにも訳が分らないんだよ」

と言うと、すすつと寄ってきて舌つ足らずの声で、

「先生……マア起きていたんだね。あたいを、先生は待っていてくれたんじゃないのかね」

と、ケルミツシユが辟易するさまを、ダネツクが笑いながら話したのである。あんな白痴を、ただ天母語ハーモが読めるだけで連れて

くるもんだから、ケルミツシユ君も、えらい目に逢うんだ。だいたい、無思慮、無成算でケルミツシユ君は駄目だ。やはり、これは俺の探検だねと、ダネツクが鼻高々に言うのである。しかしそれは、ただ浅いとこしか見えぬ、人間の目にすぎない。翌朝から、すべてが白痴ケテイを中心に廻転してゆくようになった。

朝まだき、とつぜん銅鑼どらや長喇叭ちやうぱの音がとどろいた。みると、耳飾塔エーゴや緑光瓔ようれく珞らくをたれたチベット貴婦人、尼僧ぎそうや高僧ぎそうをしたがえて活仏げぶつが到着した。生き仏ミンチ・フツクツさま、おう、蓮芯ニ・バートメの寶石よ、南無——と、寺中が総出のさわぎだった。探検隊がそれに相当の寄進をしたので、午後、隊のための祈願をすることになった。読經の合間合間に経輪がまわっている。むせつぽい香煙や裝飾の原色。

だんだんケティは眩暈めまいのようなものを感じてきた。すうつと、目のまえのものが遠退とおのいたと思うと、ケティはそれなりぐたりと倒れた。

気がつくと、瑜伽ナル・ヨル、秘密修験サン・ナクの大密画のある、うつくしい部屋に臥ねかされていた。黄色い絹の天蓋に、和ホータンの絨じゅうたん緞だん。一見して、活仏げぶつの部屋であるのが分る。すると、西藏靴チベットをかたりかたりとさせながら、活仏いきぼとけの影がすうつと流れてくる。むくんだ、銅光りのする顔がちよつと覗いたが、それはやがてひれ伏した。

「生ミンチ・カンキンき観音、おう、まことの観音カンキンとは貴女あなたさまじや。毘ヴィシ沙門ユラヴァナ天の富、聖天カネシヤの愉樂を、おう、われに与えたまえ」

ケティには、なんでそういわれたのか、考える頭脳あたまはない。常人でも、それはじつに解しがたいことだ。しかし彼女は、それを機会にてんで無口になった。それまでの、のへのへと笑みもうげん妄言を言うケティは、もう何処かへ消えてしまったのだ。ただ、「天母一モ・サムバ・チヨウ生上の雲湖」を覆う密雲をのぞんでは、時々、きらつと光つては消える大氷河のかがやきに……そのときの笑みはてんで違うものになっていた。彼女は、なにかの叫び声をうけはじめたのだ。「ケティは、何処にいるね」ダネツクがちよつと意気込んだ声で折竹に訊いたが、相手の様子を見るといきなり言い紛まぎらわせ、「いやね、大氷河のしたのA F点の傾斜を測りたいんだ。ケルミツシユ君がいじっていた経緯計セオドライトはどうしたね。君、ケルミツシユ君

を見かけなかつたかね」

それは、やはり折竹も気付いていたことだつたけれど、きゆうにケティが美しくみえてきたのだ。あるいはそれは、周囲の自然の線が微妙な作用をするのだろうか。荒茫ただ一色の雪の高原にたち……風や雷にきざまれた鋸状のこぎりの尾根を背にしたケティは、あの醜さを消し神々ことうこうしいまでに照り映える。と急に、彼女をみる男の目もちがつてくる。ダネツクもケルミツシュも、ケティを雄のように追いはじめたのだ。

「ダネツク君、君は近ごろどうかしているね」折竹が、もしケティの問題でこの探検隊が崩れるようではと、一日、ダネツクをとらえて真剣に問いはじめたのだ。

「どうしたって　僕は相変わらずの僕さ」

「いや違う。まえには、もつと剛毅不屈なダネツクだったね。それが、山男のくせに女の尻を追いまわす。それも白痴ばかのケティとは、呆れたもんだと思うよ。ケティは……やはり白痴で醜い女さ。ただ、それを見る君たちの目が、妙な工合に違ってきただけなんだ」

「そうか、僕もそういや気がついていることがあるんだ。君がケティをみる目も尋常じゃないよ」

折竹は、俺もかと思うとぞつと気味わるくなった。じぶんだけは、男のなかでも超然として、なんの白痴女と些細ささいも思わぬと考えていたのに、やはり、ダネツクがみるじぶんの目もちがって

る　それが、「天母生上の雲湖」の不思議な力だろうか。いまに、このバダジャツカで愚図付いているうちには、全員が氣違ひになつてしまふのではないか。さすが、援蔣ルートをふさぐ大使命をもつだけに、まだ折竹は正常さをうしなつていない。

そこで、二人を急せきたてて攻撃準備をいそぎ、いよいよその三日後魔境へ向うことになつた。海拔一万六千フィートのここはなんの湿気もない。ただ烈風と寒冷が髭ひげを硬くばらせ、風は隊列を薙ないで粉のような雪を浴くびせる。やがて、櫛くしのような尖せん峰ぼうを七、八つ越えたのち、いよいよ「天母生上の雲湖」の外輪四山の一つ、紅蓮峰の大氷河の開口くちへでた。

そこは、天はひくく垂れ雲が地を這はい、なんと幽冥界ゆうめいの荒涼

たるよと叫んだバイロンの地獄さながらの景である。氷河は、いく筋も氷の滝をたらし、その末端は鏡のような断崖をなしている。まったく、そこで得る視野は二十メートルくらいにすぎない。暗い積雲と霧のむこうに、不侵地、「天母生上の雲湖」が、傲然ごうぜんと倨坐きよざしている。

「ここまでだ。前の三回とも、ここからは往けなかったのだ」ダネツクが、感に耐えたような面持で、大氷河の開口を指さした。

「ホラ、あれがバダジャツカでも絶えず聴えていた音だよ。千の雪崩の音、魔神の咆哮ほうこうと——僕が報告に書いたがね。それは、この開口をのぼった間近で合している二つの氷河の、右側のを吹きおろす大烈風だ。だから、たとえば僕らがこの開口をのぼっても、

すぐに地獄の五丁目辺になつてしまふのだ。ケルミツシュ君、ここが、人間力の限度、人文の極限だ。どうだ、ゆくかね」

「ゆこう」ケルミツシュは一瞬の躊躇ちゆうちよもなく答えた。「往けるところまで……それは君にお願いすることだがね。僕は大烈風を衝ついてもなお先きへ行く」

すると、ケティが無言のまま頷うなずいた。で、とにかく、人間がゆるる最後まで往こうと、人夫をそこに残し開口をのぼりはじめた。壁や裂け目から、氷の不思議な青い色がのぼっている。そして、それは一足ごとが生命の瀬、なんだか故郷が思われ、孤独の感が深くなつてくる。やがて四人は、すぐ大烈風へでる岩陰にかたまつて、この魔境をまもる大偉力をながめていた。

まさに、カリブ海のハリケーン 颯ひょう風の比ではないのだ。それは、颯ひょうという疾風の形容より、むしろもの凄い地鳴りといったほうがいいだろう。

飛ぶ氷片、堆石の疾走——みるみるケルミツシユに絶望の色がうかんでくる。

すると、この難関をあくまで切り抜けて、ぜひ魔境に入り九ナブナテイヨ・ラハード十九江源地の、Zwagri《ツワグリ》の水源をふさがねばならぬ折竹は……。しばし、目をとじていたが、ポンと手をうって、

「ある、名案がある」とさげんだ。

「えっ、一体どんなことがあるんだ？」

「それはね、氷河の表面をゆかず底をゆくことなんだ。たとえば、

どんな大科学者がどんな発明をしようと、たとえば、千ポンドのおも^{おも}錘りをつけようと、この風のなかは往けぬよ。しかし、氷^{クレヴァス}罅^{アス}をくだって洞を掘ったら、どうだ」

「なるほど」ダネツクもともども叫んだのである。

「そうだ。表面氷河は氷^{ピッケル}斧をうけつけぬ。しかし、内部^{なか}は飴^{あめ}のように柔かなんだ。掘れるよ。とにかく、折竹のいうとおり氷^{クレヴァ}罅^{アス}を下りてみよう」

やがて、青に緑にさまざまな色に燃える氷^{クレヴァ}罅^{アス}の一つを四人が下りていった。試しに氷^{ピッケル}斧をあてると、ボロツとそこが欠けた。

アジアの怒り

それは、大レンズのなかへ分け入ってゆくような奇観だった。さいしよは、疲労と空気の稀薄なためおそろしい労作だったが、だんだん先へゆくにしたがい氷質が軟かくなる。しかも、地表とはちがい、ほかつくような暖かさ。そこで諸君に、氷河の内部がいかなるものか想像できるだろうか。

四人はいま、微妙なほんのりした光に包まれている。しかも、四方からの反射で一つの影もない。円形の鏡体、乱歩の「鏡地獄」のあれを、マア読者諸君は想像すればいいだろう。そのうえ、ここはさまざまな屈折が氷のなかで戯^{たわむ}れて、青に、緑に、橙^{オレンジ}色に、

黄に、それも万華鏡のような悪どきではなく、どこか、ひようびよう縹渺

とした、この世ならぬ和らぎ。これが、人間をはばむ魔氷の底かと、時々四人はぐるりの壁に見み惚ほれるのである。そのうち、ケルミツシュがアツと叫んだ。みると、氷のむこうにまつ黒な影がみえる。

「大メガテリウム懶い獣ぎよ」と呼い吸きを愕ぎよつと引いて、ダネツクが唸るように言っ

た。「あれも、第三紀ごろの前世界動物だ。高さが、成獣なれば二十フィートはあるんだがね」

それは、やや距離があつてか、そう巨おおきくは見えない。しかしこれで、「天母生上の雲湖」の秘密の一部を明かにした。

やがて往くと、一本その長毛が氷隙から垂れている。ダネツク

は、それを大切そうに蔵しまいこんだ。すると、四人の間に期待とも、不安ともつかぬ異様なものはじまった。どうもそれが、氷河に埋ったようにはみえない。なんだか、大メガテリウム懶獣のいるあたりが空洞のように思われて、いまにも、氷壁をくだいた手が躍りかかりそうな気がする。そこへ、ダネツクが息いきづま窒まつたような叫びをした。

「どうした」

みると、頸くびすじ筋を撫でた手がべつとり血を垂らしている。そこで、恐怖は絶頂に達したが、別に、氷をやぶつて突きでた爪のようなものもない。それに、ダネツクの頸には傷もなく、痛みもないのになんとした事か。あくまで、粘ったまっ赤な血だ。ダネ

ツクはじつとながめていたが、「なアんだ」とフフンと笑い、

「ヒルデフランチア・リヴラリス 紅藻

の、じつに細かいやつだ」と言った。

見ると、紅藻をふくんだ天井の氷が飴あめのように垂れてくる。し

かも一層、四人がうごく微動につれ甚だしくなってくる。氷河水

の雨が、すだれ簾を立てたように降りしきるかと思えば、また、太く垂

れて石せきじゆん筍をつくり、つるつる壁を伝わる流れは血管のように

無気味だ。そして今にも、ゆるい弧をえがいて、天井が垂れてき

そうな気がする。四人は、いま氷河のちようど核へ達したのだ。

「天地開闢以来、地球はじまって以来、まだ、氷河の芯にあるこ

の泥水をみたものはあるまい」

折竹が、驚異と感動にぶるつと声をふるわせると、

「そうだよ。しかし、どうも僕は勘違いをしていたらしい。それは、^{リム・ポー・チエ}紅蓮峰の嶺のあの怪光なんだが、さいしよ僕は、ラジウムの影響をうけた水晶とばかり思っていた。ところがどうやら、氷のしたのこの紅藻らしいんだよ。こんな聖地で欲をだしたんで失敗したのかも知らんね」とダネツクが自嘲気味にいうのだった。やがて、芯の泥氷部をさけて二、三時間も掘ると、なつかしい外光がながれ入ってきた。

出ると、大烈風はもう背後になっている。そこは先刻は岩陰でみえなかったが、まるで色砂を撒いたような美しい^{こけ}蘚苔が咲いている。ところが、前方をながめれば、これはどうしたことか、そこは、流れをなす堆石の川だ。せつかく、大烈風を破ったと思え

ば危険な堆石のながれ。四人は、そこでもう前方へ進めなくなつてしまった。

「これまでだ。もう、われわれは断念あきらめようじやないか」とダネツクが力なげに言いだした。「僕らは、あの危険な開口をのぼり、大烈風をやぶった。それだけでも、前人未達のだいはぎよう大覇業ということができる。帰ろう。今夜は藓苔こけのなかへ寝て、明日は戻ろう」

しかし、それがもう出来なくなつていたというのは、なにも、さつき掘った洞が塞つたというのではない。とにかく、その夜四人を包みはじめた不思議な力をみれば分る。つまり「天母ハイモ・サムバ生上チヨウの雲湖」の掟に従わされたのだ。その夜、なにやらケティが草に言いはじめた。

「マアニの草、あたしに惚れたつて、お前じや駄目よ。そんなに、べたべた付着くっついたつて、あたしや嫌」

よく、野葡萄ぶどうの巻鬚ひげの先の粘液が触れるように、ケティにベタベタ絡からみついてくる草がある。その情緒を知らせる微妙な力が、彼女をじわりじわりと包んでいった。そこへ、相応じたようにケルミツシユも言う。

「そうかね、この草は寒いと言っている。サアサア、がたがた顫ふるえなくても僕が暖めてやる」

それは、咳嗽くしゃみ菽そらまめ豆まめに似た清潔好きごみな小草で、塵ごみがはいると咳嗽くしゃみのようなガスをだす。そして、いきんだように葉をまつ赤にして、しばらく、ぜいぜい呼吸いきをきるように茎をうごかしてい

る。そういう植物の情緒や感覚が触れてくる、二人はもう普通の人ではない。ダネツクも折竹もつき合うだけで、見るも聴くも気味悪そうに黙っていた。魔境「天母生上の雲湖」へ溶けこんでゆくこの二人を、救い出すのはどうしたらいいのだろう。

「サア、行こう。ここで愚図愚図してたって仕様がないう、君」翌朝、さんざん押問答のすえ焦らつてきたダネツクが、語気を荒げていう。しかし、ケルミツシユの態度は水のように静かだ。

「だけど、これが僕の希望なんだからね。あくまで、踏みとどまって登攀の機をねらうよ。それに、折竹君も僕とくるといふし、とにかく、ダネツク君にだけ一先ず帰ってもらおう」

「そうか」と棘いらいらだった目でぎろつと折竹を見て、「君もか　こ

のダネツク 探^{エキスベジション} 隊の……隊長だけが帰って何になる。それとも、君らが死にたいというなら、別だがね」

「死にはせん。僕にはこの堆石の川を突つきれる自信がある。ただ、方法は分らぬが、そうなるような予感がある」

「止せ」ダネツクは堪^{たま}らなくなつたように、叫んだ。なにより、彼を搔^かきたてたのはケルミツシュに寄り添っているケテイの像のような姿だ。

「君は帰れ！ 僕は引き摺^ずつても、君を連れてゆく」

とケルミツシュの腕をぐいと捉^{とら}えたとき、止めようと、馳^はせよつた折竹の目にそれは怖ろしいものが映つた。堆石のながれを越えた向うの断崖の積雪が、みるみる間に廂^{ひさし}のように膨^{ふく}れてきた。

雪崩なだれ

と思ったとき氷塊を飛ばし、どつと、雲のような雪煙が

あがったのである。とたんに視野はいちめんの白幕に包まれた。

折竹は、暫時ざんじその場で気をうしなっていたのだ。

やがて気がつくくと、堆石のうえが雪崩で埋まっている。そして、

四つの足跡が向うまで続いているのだ。これが、ケルミツシユの

予感というものか。彼とケティは雪崩のうえを渡り、「天母生ハイモ・サム

上の雲湖バ・チヨウ」の奥ふかくへと消えたのである。折竹も、続こうと

したが起きあがることが出来ぬ。その間に、ごうごうと続く堆石

のながれが、しだいに橋となった雪崩を払ってゆくのだ。

「ああ、せめて這はいでもできれば、俺は往くんだのに……」

万斛ばんこくの恨みが、いま分秒ごとに消えてゆく雪橋はしのうえに注が

れている。援蔣ルートをふさぐ……ナフナテイヨ・ラハード九十九江源地へゆく千載の好機が、いま折竹の企図とともに永遠に消えようとしている。

彼は、打撲と凍傷で身動きも出来なくなっていた。

「本望だろう。ケティは、遠い遠いむかしの、血の揺籃ようらんのなかへ帰った。ケルミツシユは、現実をのがれて夢想の理想郷へいった。二人はいいが……せつかく此処ここまで漕ぎつけて失敗しくじる俺は哀れだ」

となおも手をついて起き上ろうと試みたとき、ふと掌のしたに紙のような手触りを感じた。みると、ケルミツシユが書いた走り書きのようなものだった。

折竹君——

僕とケティは、これからこの世界の向う側の国へゆく。君は、現実逃避をする僕を嗤わらうだろう。しかし、素志を達した僕は、このうえもなく満足だ。あの「ハーモ・サムバ・チヨウ天母生上の雲湖」には何かがあるだろう。ユートピア　しかし僕は、小説にあるような美しさは求めてない。きつとそこには、冬眠生理でもあるような人間がいるだろう。ながい冬は眠り、短い春は耕す——そういう世界にこそユートピアはあるのだ。

君よ、悠久うごかぬ雲に覆われた魔境「ハーモ・サムバ・チヨウ天母生上の雲湖」とともに、時々、僕とケティのことも思いだしてくれ給え。なおダネツクは雪崩なだれのしたにいるよ。

雪橋^{はし}をわたるまえとり急ぎ

ケルミツシユより

その夜、主峰の雲のなかで囂々^{ごうごう}と雷が荒れた。電光が、尖峰^{パーク}をわたりながら、アジアの怒りのように……ダネツクへは死、ケティとケルミツシユは己が手におさめ……一人ただ日本人折竹のみに生還を許したのである。そして折竹は、※※^{ローロー}の^{ローロー}人夫の背に負われて、Zwagri 《ツワグリ》、^{ナブナテイヨ・ラハード}九十九江源地^{うわごと}と嚙^{うわごと}言を言いながら魔境をでた。

青空文庫情報

底本：「人外魔境」角川ホラー文庫、角川書店

1995（平成7）年1月10日初版発行

底本の親本：「人外魔境」角川文庫、角川書店

1978（昭和53）年6月10日発行

※副題は底本では、「天母峰《ハーモ・サムバ・チヨウ》」となつています。

※底本は新字です。なお「癡呆」は、底本通りです。

入力：笠原正純

校正：福地博文

1999年2月13日公開

2014年7月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人外魔境

天母峰

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 小栗虫太郎
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>